
サポートBook

KEIMEI Real Voice

～帰国生、国際生のみなさまへ～

日本社会へのよりスムーズなソフト・ランディングを願って
先生方 保護者の声をまとめました



啓明学園
グローバルネットの会

帰国生サポートBook

はじめに

このサポートBookはこれから入学・編入される皆さまへ、入学前に知っていたら良かった！と思う学園のリアル情報を、国際センターの先生へのインタビュー、在校生・保護者の方々へアンケートを実施し、「グローバルネットの会」保護者がまとめたものです。

16年ぶりの改訂となるこのサポートBookは、2020年の新型コロナウイルス感染症の流行を経て、社会の仕組み、学習指導要領の改訂、受験制度の多様化など、目まぐるしく変化し続ける時代に合わせてアップデートしました。

期待と不安に胸を膨らませて帰国する生徒・保護者の方々にとって、日本の文化や習慣、教育環境にスムーズに適応するための有益な情報となり、少しでもお役に立てると幸いです。

また、共に学園生活を送る国内生保護者の方々にも、様々なバックグラウンドで育った国際生が感じるカルチャーギャップ、悩みなどを知っていただくきっかけとなれば嬉しく思います。

最後になりましたが、このサポートBook作成の主旨に賛同し協力してくださった先生方、保護者の方々へこの場をお借りして心から感謝を申し上げます。

グローバルネットの会一同

「グローバルネットの会」について

様々なバックグラウンドを持った生徒が集まる啓明学園には、「グローバルネットの会」があります。この会は帰国生の保護者、国内インターナショナル生の保護者、外国籍生の保護者が集まり、情報交換や悩みを共有する場として立ち上げられました。現在では卒業生の保護者や、国際社会や異文化交流などに興味をお持ちの国内生の保護者とも繋がりを持ち、学園の保護者ならとたたでも気軽にご参加いただける会へと発展しています。

それぞれ滞在していた国や年月、子ども達の年齢が異なっているも、帰国編入した殆どの方々がご自身が滞在していた国とのカルチャーギャップに驚きや戸惑いの声を上げています。ましてや日本が母国とは違う国であればカルチャーショックも大きなものでしょう。「グローバルネットの会」には初等学校、中学校、高等学校と幅広い層の保護者が参加しており、どのようにカルチャーギャップを克服したか、帰国生ならではのクスッと笑える失敗談、学園の話題、英語資格試験、大学受験、子育て、思春期の子ども達の見守り方、お悩み相談など話題は豊富です。

このサポートBookを手にとっていただいた皆さま、啓明学園へ入学・編入される皆さま、ぜひ「グローバルネットの会」に足を運ぶください。お話し出来ることを楽しみにしております。



第1章 / Chapter 1

◇ 初等学校インタビュー

1.What is the International Progress Class?

初等の国際学級とは

2.Support Classes for Japanese and Other Core Subjects

授業について

3.Supporting Each Students' Language

言語について

4.Assignments for English and Other Core Subjects

宿題について

5.Messages From Keimei Gakuen

伝えたいこと

◇ 初等学校 / Column

第2章 / Chapter 2

◇ 中学校・高等学校インタビュー

1.What is the International Progress Class?

中高国際プログレスクラスとは

2.Support Classes for Japanese and Other Core Subjects
日本語の指導・各教科のサポート授業について

3.Support Class for Japanese -Writing Essays-
国際学級の国語について -作文・小論文-

4.Switching to General Classes
一般クラスへの移行について

5.Supporting Each and Every Students' Language
言語について

6.International English Classes and
Non-English Language Preservation Classes
英語保持クラスについて

7.Support for College Prep and Career Decision
進路や受験のサポートについて

第3章 / Chapter3

◇ 在校生&保護者アンケート / Surveys

◇ 帰国者コラム / Columns

初等学校インタビュー

Q:国際生の保護者 A:国際学級の先生



1 初等の国際学級とは

Q. 読み書きはできますが、同学年のお子さんと一緒に授業がついていけるとは思えず、心配です。国際学級の取り出し授業ではどのように指導していただけますか？

A.1 日本語の文字の読み書きができる子については、文部科学省の進めるJSL (Japanes as a Second Language)プログラムに基づいて、日本語を母語としない子どもが教科を学べるよう支援しながら、一般クラスと同じ内容を学習できるようにしています。具体的には、言葉だけでなく視覚的に見せる、体験を通じて理解に結びつける、やさしい言葉への言い換えなどで、いろいろ織り交せながら学年相当の教科学習ができるようなプログラムが存在しています。

全く日本語の読み書きができない場合では、単語、つまりひらがなからの指導となります。子ども達の力に合わせながらプログラムを組んでいて、少しずつ「話す・聞く」から「読む・書く」に行けるよう考えています。

A.2 JSLプログラムに基づいた指導法はありますが、日本でもまだあまり浸透していない方法です。言葉が少ない子ども達にとって視覚的な支援ってすごく大事です。言葉でいくら説明してもピンとこないモノを『郵便受け』はこれだよ」と絵で見せれば、「ああこれウチにもあるな」ってすぐ分かることができるでしょう。写真や絵カードをたくさん使ったり、体験(手を動かし体を動かす)でよく分かる動作・算数もやってみて分かることを通して学ぶ方法を使っています。

2 授業について



- Q.** 初等では理科・社会を国際学級での取り出し授業ではなく、クラスでみんなと一緒に授業するのはなぜですか？
- A.** 理科・社会に関しては、実験や観察、社会見学などがあるので、クラスでみんなと一緒に授業を受けた方が、色々な意見、アイデアを出し合うことができるので良い学びにつながります。
- Q.** 高学年になると理科・社会の教科用語が難しくなりますが、どのように対応されていますか？自分の言葉（第一言語）だと理解できている内容や語彙も日本語になるとわからないなど、授業の理解の障害になることがあるように思いますが…
- A.** 現在、理科の担当教員は元国際学級教員です。国際生がどのような所でつまづくかをよく知っているので、例えば「二酸化炭素」などの難しい言葉は、漢字を大きくわかりやすいように黒板に書いたり、英語の言葉に置き換えて説明をしたり、机間巡視しながら生徒をフォローしています。
- 社会は5, 6年生になると地理・歴史になります。国際学級では、週6時間ある国語の時間を必要に応じて利用し、クラスでの社会の授業に先行して、資料集などに目を通したり、教科用語を予習して骨組み（概要）を理解する時間にあてています。そうすることで、実際にクラスで授業を受けた時に、内容を理解しやすくなります。5年生の産業学習はとくに難しいです。米作りなどは自分達で体験するので（身近なものとして）理解につなげやすいですが、工業や世界のことなど（身近でないことは）学習することが難しいのです。そういった難しい学習の手助けのお勧めの一つに親子で一緒にニュースを見て、気になる話題について話し合うことがあります。知識や語彙を増やし、考える力を伸ばすことにつながっていくと思います。また、クラス内でJSLを設けることも検討していきたいと思っています。

Q. 帰国直後の数年間の学習は、言語が障害となって真の理解にはなっていない部分もある生徒もいると思いますが…

A. すべての教科を短い期間でキャッチアップすることは難しく、それなりの時間がかかると考えています。例えば、～工業地帯を知らなくても、他の生徒が知らないことを海外で学んできています。だからすべてがみんなと同じである必要はないと思います。教科用語は授業でなんとなくわかったら、その他の生活ですごく困ることはないので、すべてを記憶させておく必要はないと思います。大事なことは、思考するための言語がなくなったら困るということ。自分が伝えるべきことを伝えることができ、考えることができる言語を持っていたら、今は全部のことは無理だけど、長い間をかけてみると、本当に必要なことは最終的に自分で学ぶ力を身につけることがよいのかな、と捉えています。

Supporting Each Students' Language

3 言語について

Q. 国際生の母語のサポートはどのようにされていますか？
気をつけている点はありますか？

A.1 今まで持ってきた言語（母語）が弱くなってしまうと言葉の基盤が揺らいでしまいます。そうすると日本語習得にも影響が出てきます。また、言葉の基盤が揺らいでしまうと、その子どもの人格形成にも良い影響がないので、今持っている第一言語を大事にすることを心がけています。

A.2 母語の指導も発達段階によって異なります。4年生以上で帰国の場合、滞在国の言語が第一言語で定着している場合が多いです。しかし、低学年の場合は、日本語が学習の言語、家庭の言語は別という場合があります。例えば、中国の両親を持つ2年生の生徒達が国際教室で、週に一回、中国語の授業を受けているのですが、この時間は家庭（生活の言葉）の言語の勉強の時間、気持ちいい時間、アイデンティティーを育てるのにもいいかなと感じています。楽しそうに授業を受けていますよ。授業の内容は、1年生のうちは「話す聞く」を中心に、2年生になって「読む」ことを始めました。絵本を読んでいます。まだ低学年のうちは、日本語を学習の言葉として学校で学んでいる最中なので、中国語の読み書き学習まで加えると混乱してしまうので、（日本語が定着するのを）待っているところです。

Q. 英語以外の言語のサポートはありますか？

A. 初等で現在、対応しているのは中国語です。以前はドイツ語、韓国語のサポートも行っていました。

Assignments for English and Other Core Subjects

4 宿題について

Q. 国際生は宿題が多いと聞いたのですが、実際はどのようなのでしょうか？

A. 国際英語、国際学級、クラスの宿題が出るので生徒、保護者から多いという声は聞きます。とくに週末に多くなる傾向があります。それは私たちの伝え方が課題だと思っています。クラスの国語の宿題に問題の読み取りが難しいことが少なくありませんし、量も多くあります。国際学級の宿題は、基本的には自分の力でできるものをくり返し出すようにしています。

Q. 宿題が多いのは先にある大学受験を見据えてのことですか？

A. 国際学級に関しては、学ぶチャンスを狭めたくないということがあります。できるのにやらずに習得できなかったということは避けたいと考えているので、その子の力に合ったやり方を保護者の方と一緒に考えたりして、生徒それぞれに合ったように出しているつもりです。

Q. 英語の宿題は、保護者の希望で英語を保持するために多いのでしょうか、学校の英語のカリキュラムで宿題が多いのでしょうか？

A. 両方だと思います。国際英語クラスの宿題は、週3回の英語の授業だけでネイティブレベルの読み書きを保持させることは難しく、宿題でカバーせざるを得ないところがあります。

Q. 保護者との連携はどのようにされていますか？

A. 学期末に、クラス担任、国際学級担任、国際英語の担任との面談が組まれるので、その時に生活の様子、学習の様子などを話し合う機会があります。また相談があればその都度、問題点と一緒に取り組むことができます。

Q. 学年レベルに追いつくための家庭でのサポートはどうすれば良いでしょうか？

A. 日本では小学校低学年（1，2年生）の子ども達への宿題のケアをお母さん方がすることが多いですが、特に海外から帰ってきたお子さん達は宿題の習慣がなかったり、日本語もどうしたらいいのかわからないため、日本人のお母さん達は過去お過ごしになった日本の学校のイメージで、子どもの宿題を見ていただけるとありがたいなと思います。特に音読を聞いてあげることがとても大事だと思いますし、文字を書いたり、言葉の意味がわからなかったりする時に、つきっきりではなくても子どもに教えていただけるとありがたいです。（家事をしながらでも）お母さんの方に、声をかけやすい、質問をしやすい雰囲気があるといいですね。
また、（できれば毎日）読み聞かせをしていただけるとお子さんの日本語の力が伸びます。毎日が難しければ週末でもよいです。おうちの方の一番得意な言語で読んであげてください。



5 伝えたいこと

Q. 海外で長く生活をした後、いざ日本に帰国すると、子どもなりに疑問に感じる「自分って一体何人??」という問題があります。小学校ではどうお考えですか？

A. 国際生の子どもたちは一般的な〇〇人と言うところには当てはまらないかと思うんです。アイデンティティー＝自分らしさ、「～ちゃんは、～ちゃん。」「～くんは、～くん。」私はワタシでオッケーと思えること、言いたいことは我慢しないで言える、そして振る舞える。学校は私らしさを見せられる場所、自分を解放できる場所であること、そして、その子らしさを守ってあげるということを一番大事にしています。

Q. 最後に帰国後、子どもの入学先で悩んでいる保護者の方へ帰国生に対するケアが手厚い啓明学園として伝えたいことはありますか。

A. 手前味噌ですけども、私は啓明学園って大変素晴らしいプログラムを持ってるなあと思うんですね。外国から帰ってきて、日本で暮らしている日本語ネイティブの子どもと同じように日本語が話せる子どもはそんなに多くないです。そして日本に帰ってきたときに、日本の公立の学校に入って言葉が引っかかってしまうと、教科学習が頭に入ってこないことが多いです。

私達も外国に行って英語はなんとなく分かるけど、一つの単語が引っかかると「何だろうこれ、聞いたことはあるけど」って考えてしまって、先の話が頭に入ってこないですよ。それと同じことが多くの子どもに起こっています。

私がお勧めするのは啓明学園の受け入れ態勢です。学習担当者が個々の日本語四技能を把握し、子ども達一人ひとりの目標を立て学習を進めます。また在籍クラスの担任の先生や専科の先生とも日々子ども達の情報支援をしながら多面的に成長を見守っています。学校全体としても子どもの文化を丸ごと受け入れるというスタンスなので、子どもにとっては過ごしやすいと思います。

☆初等科Column☆

【海外の多様な価値観や文化を受け入れられる子どもたち】

年に数回、世界各国の文化や習慣を理解するきっかけとなるような特別授業を行なっています。

「Feel Philippines」「Feel Mexico」「Feel America」のような感じです。この取り組みは時々世界には素晴らしいところがあるんだ、ということにフィーチャーして、みんなで「面白いね、良いね」と分かち合う目的だそうです。子ども達は知ることが楽しくて、「お互い違うからつまらない」「私と違うから仲良くできない」という事は全くなく、「こういう文化があるんだ、行ってみたいね」とポジティブに捉えられるそうです。

先生からのコメントの中で印象的だったお言葉があります。

一つの国の文化に出会った時、その国の良い部分も「もっとこうだったら良いのに」という部分も有りますよね、そのプラスの部分もマイナスの部分も引くくめて私たちは受け入れているんです。貧しさの中でもみんながハッピーに暮らしていたり、マイナスの部分があってもその中にプラスの部分があるというのを先日の「Feel Mexico」で学びました。

「Feel philippines」でも貧しくても家族がとっても大事でそれが幸せ、といったメッセージがあったんです。

マイナスもプラスもなく、「こういうところは素敵だね」という言葉が子ども達の中から出てくるのがとても良いなと思います。

娘が6年生の時、担任の先生よりご依頼をいただき、「Feel America」のプレゼンテーションを親子でやらせていただきました。

帰国して5年が経ち、娘は小さい頃の記憶ですので、少々忘れていました。

このプロジェクトをきっかけに、写真を見直し、懐かしい思い出話が娘とだけでなく、家族で久しぶりに振り返る楽しい準備時間となりました。

娘がクラスのお友達に自分の経験を通じて、アメリカの良いところを堂々とプレゼンしている姿を見ることもでき、母にとっても貴重な時間となりました。

中学校・高等学校インタビュー

Q: 国際生の保護者 A: 国際学級の先生



01. 中高国際プログレスクラスとは

Q. 国際プログレスクラス*¹（以下 国際学級）で国際生*²はどのような環境で学びますか？

A. 海外の教育課程をベースに学習してきた国際生が在籍する国際学級では、中1～高3の生徒たちが同じ空間で学ぶ「Peer Learning」をととても大切にしており、帰国による環境の変化に戸惑いを感じている生徒たちには学習面のサポートと同時に精神面のサポートが必要だと考えています。

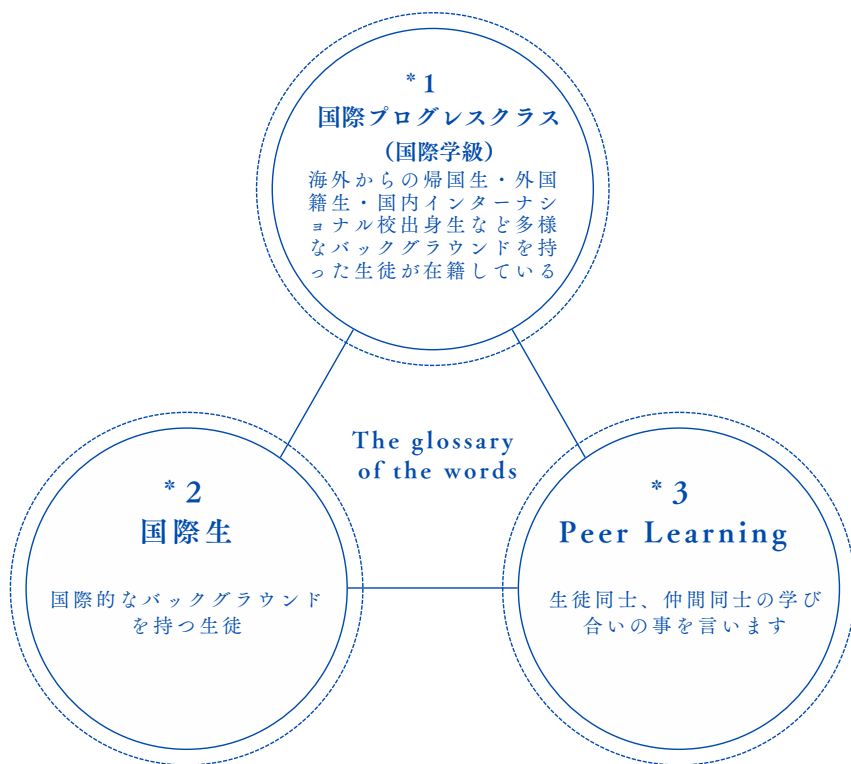
国際学級で「Peer Learning*³」を大切にしている理由は、私たち教師が指導する以上に同級生・先輩・後輩・同じ悩みや経験をしている生徒同士が与える影響が大きいと感じているからです。同じような経験をしてきた先輩の姿を見ることで、帰国したばかりの生徒は『このように感じているのは自分だけではないのだな』と励まされ、希望を持つ事ができます。後輩ができた生徒は以前の自分を思い出し、気持ちの変化に気づくなど自分自身の認識が変わるきっかけになります。

Q. 国際学級での教育のモットーをお聞かせください

A. 教育のモットーは一人ひとりを丁寧に見守りながら、「自己肯定感を高める」「言葉全体を支える」「生徒たち同士がpeerで学ぶ」を大きな柱にしています。そして、「生徒の成長を待つ」ことも啓明学園国際学級のらしさの一つです。「待つ」事はとても勇気が要りますし、私たちも内心複雑に思う時もありますが、生徒の話を聞き、それぞれの生徒の成長を見守りながら成長を待つようにしています。

Q.ホームルームクラスでの国際生の様子もお聞かせください

A. 国際生と国内生は授業が始まる前後や昼食、体育や音楽など言語的な負担が少ない授業を同じホームルームクラスで過ごします。国際生は日本語に苦手意識を持つ生徒も多く、クラスの中でどのようにコミュニケーションをとったらいいか分からず、不安に感じる生徒も少なくありません。そんな国際生にとってのホームルームクラスは、国内生とどのようにコミュニケーションをとったら良いかを学べる場所であり、国内生にとっては日常的に多言語を耳にしたり、様々な価値観に触れる事ができ、多様性を育める場所になっています。



Q. 国際生の悩みに先生方はどのように対応していますか？

A. 授業中でも生徒たちの声を聞くように心掛けていて、場合によっては学習範囲を終わらせるよりも生徒たちの問題解決や心のケアが大切な場合があります。国内生と一緒にクラス内では言えないことや、家庭での問題（親との意見の相違）など、悩みを抱えている状態では勉強にやる気が起きません。このような時にはPeer Learningを活用して「私も同じように辛かったけど、こうして解決して、今はこういう風に思っているよ」と、敢えて授業内で先輩と話すよう促すこともあります。自分自身の悩みを解決するためにはそうした時間が必要で、それも国際学級の重要な役割の一つだと思っています。

Q. 言語、意見、文化などの多様性によって起こるトラブルに学校はどう対応していますか？

A. 文化の違いによるトラブル、そして単純に友達同士のトラブルなど様々ですが、異なる意見のぶつかり合いによってお互いの理解を深めたり、多文化、多様性を認め合う心を育てる必要な成長のプロセスと捉えています。絶対に解決しなければ強制的に指導しても必ずしも解決するわけではなく、時には解決できない事があっても良いのです。生徒たちが社会に出てそのような場面に直面した時に、どのように向き合ったら良いかということに寄り添って、一緒に考えるという姿勢で対応しています。そして、ここでも「Peer Learning」を活用し、トラブルにうまく対処している生徒を見て「ああいう風に対処すると良いのか」と、感じる事ができる学びの場を作るようにしています。また、生徒同士のトラブルは国際学級だけで問題解決するのではなく、担任や学年付きの先生も国内生、国際生の分け隔てなく、クラスや学年の問題として気にかけて関わっていることは学園の魅力です。

02. 日本語の指導 各教科のサポート授業について

Q.国際生の日本語力は生徒により差がありますが、どのように指導されていますか？

A. 基本的に国語・数学は一人ひとりの進度に合わせて個別で対応し、それぞれの学んできた事を生かしながら、足りない部分を補っていきます。理科・社会は学年ごとに国際生用のクラスを作り、ホームルームクラスと同じ内容を言葉のサポートを取り入れながら授業を行っています。先生によっては英語の単語を交えたり、漢字にフリガナをつけたり、生徒が理解しやすいようにサポートしています。また生徒同士（Peer）で英語や中国語など、それぞれが一番理解できる言語を使って教え合ったりと、多言語でディスカッション出来る環境です。



03. 国際学級の国語について / 作文・小論文

Q. 国際学級の国語授業では作文を多く書くそうですが、
どのような内容ですか？

A. 国語の授業では作文をとっても大切にしています。国際生が使っている日本語は、日常生活や家庭内で使う生活言語だけの場合があります。そのため、国語の授業では学習言語として使われている高度な文章を理解したり、作文を通して、日本語でアウトプットする力を培う必要があります。

生徒が関心を持っていないトピックについての語彙、ボキャブラリーを授業で教えたとしても生徒自身が使ええる言葉にはなりづらいので、生徒が表現したい・関心のある事柄をテーマとして設定し、その作文を添削する過程でより場面に合った日本語へ置き換えて、書くよう指導しています。自分が伝えなかった内容がこのような日本語で伝えられるのだ！という経験の積み重ねが、日本語の表現力を身につける上で重要だと啓明学園の国際学級では考えています。



「言語」は一般的に「生活言語能力」と「学習言語能力」の2つに分類されます。

- ・生活言語能力 = 日常生活で使う言葉
- ・学習言語能力 = 抽象的な思考を可能にする言葉

Q.日本語の文章や、日本の社会問題についての理解が難しい生徒に対してはどのように授業を進めていますか？

A. 作文・小論文の授業では、具体的な社会問題を取り上げ、関連する日本語の文章を読ませることで生徒が内容を理解できるようにサポートしています。また、生徒が日本語の文章を理解できない場合には、一緒に読みながら解説していきます。国語コースの中で特にサポートが必要な生徒の場合には、先生と一緒に座ってアイデアをマッピングして話を引き出すということもします。そして、この時間はアイデアを出す時間、次の時間は下書きを書く時間といった具合に、生徒自身が進め方を決めていきます。準備の過程でインプットの時間が多く必要だと感じた時には、英語や中国語など自分が理解のできる言語で調べることを推奨しています。国際学級で学んでいる生徒の最終ゴールは日本語の新聞記事を読んで、自分で内容を理解し、それに対する意見を日本語で書けるようになる事が目標です。

高2、高3では高校の出口である大学入試をある程度念頭に置いて、小論文対策にも役立つような社会問題をテーマにしています。生徒の中には情報ソースが自分の母語だけで、あまり日本社会のことを知らない生徒もいるので、作文を通じて日本語ソースのニュースに触れさせることも意識しています。授業で扱う題材について、自分で考えることは生徒のアイデンティティを育むことにも繋がるので、大事にしている授業の一つです。



04. 一般クラスへの移行について

Q. 海外の滞在年数によって一般クラスへの移行時期が変わりますか？

A. 滞在年数による影響だけではなく、生徒の日本語に対する学習意欲やモチベーション、学校生活への適応度などで移行時期が変わります。アイデンティティの有無、日本に帰国したことへの気持ちなど、個人差があるので、生徒の話をよく聞き、励まし、気持ちが前向きになるまで待ちます。なぜ私は日本にいるのだろうという気持ちの強い生徒は、日本語を勉強しようとする意欲が強く持てずに時間がかかる場合があります。保護者から「どうしてですか」という問い合わせもいただきますが、保護者と情報共有をしながら生徒の気持ちが固まるまで辛抱強く待っています。



Q.国際学級から一般クラスへの移行はどのように判断されていますか？

A. 私たちは、常に生徒の言語力を高めるための最適な環境を第一に考えています。それが一般クラスということも大いにあります。移行判断に際しては、各教科の担当の先生からも「この生徒はこの教科では一般クラスに行けるのでは？」と推薦がなされます。一般クラスへの移行は言語力を上げていくための一つのステップでもあるため、生徒にとって大きな挑戦であるのは分かった上で、それを乗り越えれば成功体験として生徒の糧となると判断した時や、言葉や心理的な面で生徒が挑戦したいと思う場合にも移行をサポートしています。それとは反対に本人が希望しない場合や、言語能力的には移行する事が可能でも、心理的に難しい場合には各々の生徒の進路や、言語的状況、学校内での状況、その他の課題なども総合的に考慮し移行を控えることもあります。生徒の日本語能力、学習の進捗状況、心理的な側面などの様々な要素を考慮し、学期ごとに検討します。

Q.一般クラスに移行したら、国際学級に再び戻ることはないのでしょくか？

A. その生徒の成功体験になると考えて一般クラスへ移行しているので、基本的に国際学級に戻ることはありません。一般クラスから国際学級に戻った結果、「自分は出来なかった」という否定的感情を持たせるような事はしたくないからです。

05. 言語について

Q.日本語の習熟度が卒業するまでに学年相応の能力に達しないと感じる事がありますか？

A. 私たちは卒業に間に合わせることを目標として日本語力を向上させるというより、それぞれの生徒たちが最終的に幸せになって欲しいという思いで指導しています。日本語以外の言語で教育を受けて育った国際生が、日本の教育を日本語で受けて育った国内生と同じネイティブレベルになるのは容易ではありません。その無理難題を生徒に一方的に押し付けて、自己肯定感を下げるより、多様なバックグラウンドを持つ生徒たちは、その経験から得た沢山の宝を持っていて、強みに出来るんだよ！ということを伝えたいし、それを大事にしたいと思っています。保護者においても、社会からも沢山のプレッシャー受けている生徒たちに寄り添う、という形でしか私たちはサポートすることができません。ですが、どのような環境であっても、生徒一人ひとりに適したペースで学び方を学んで欲しいし、自分自身が成長するためにどうすればいいか、将来どう社会で生きていきたいか、考えられるような人になって欲しいというのが私たちの思いです。



Q.日本にることや、日本語に対して前向きになれない生徒にどう接しますか？

A. 日本語に対して前向きになれないという気持ちも、生徒にとってのアイデンティティーの一部なので簡単に変えられません。私たちはその心に寄り添いながら、生徒の気持ちが向くまで辛抱強く一緒に過ごし、待ちます。私たちが無理やりやらせて成功するパターンも有るかも知れませんが、失敗した時は結構、痛手になりますからね。

Q.複数言語、多文化に囲まれた生徒たちを指導されて何かお気づきになったことはありますか？

A. 私たち国際学級でのポリシーの一つに「言葉を支える」というのがあります。生徒たちの言葉全体を支える、日本語をとにかく勉強させるということではなく、例えば培ってきた言語に中国語・英語などがあるならば、それら全部を支えてあげる必要があると考えています。なぜなら、それは宝であり財産なので、生徒たちの強みになっていくと確信しているからです。そして、母国語と第二・第三言語はお互いに関係しているので、どれかの言語だけに集中したところでその言語が伸びるわけではありません。生徒たちの持っている言語全体を支え、思考力を向上させる事が言語の伸びに関わってきます。日本語・国語の授業で生徒たちと接する時に、例えば英語だったらTOEFL ITP（学内で毎年11月に実施しています）のスコアなどで成熟度を視野に入れて担当の先生とも確認を取りながら、日本語・国語の授業に生かせるよう工夫しています。それは英語でぐっと伸びたときに、そのあと国語もぐっと伸びるというのは体験的に私たちが感じているからです。これは別の言語でも同じことが言えます。

Q.海外での生活で日本語をどれだけ維持・向上できたかが、
帰国後の語学力向上にどの程度影響しますか？

A. 大事なことは、一つで良いのでベースとなる言語をしっかり持っていることです。それが日本語でも、他の言語でも一つの言語で思考力を養えているかどうかが帰国後の日本語の伸びに大きく影響します。

Q.母国語・日本語、どちらの言語でも思考が固まっておらず伸び悩んでいる、苦しい状況の生徒にはどのような指導をしますか？

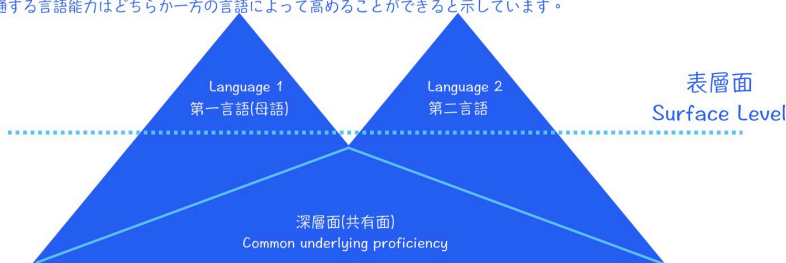
A. 大切なことは自尊感情を高めることです。できない、できないと自分で思っている中で勉強するよりも、できることに焦点を当て、成功体験を積み重ねることが生徒たちが伸びるチャンスにつながります。私たちの経験からわかることは、中学1年生で複数言語が不十分な状況に入った生徒でも6年間かければ必ず伸びるということです。言葉というものは習得に時間がかかるため、生徒も親も忍耐力が必要です。

カミンズの仮説^{*4}でも子どもの育った言語環境によっては10年かかる場合もあるとされています。

^{*4} ジム・カミンズ博士(Jim Cummins, Ph.D.)の言語相互依存仮説(氷山説)

“The Iceberg Model of Language Interdependence”

カミンズ博士は母語と第二言語を氷山にたとえ、根底にある共有する能力の存在を強調しています。この仮説によると、母語と第二言語は表面上全く違うもののように見えても深層部分で共通する言語能力の領域を持っており、二つの言語に共通する言語能力はどちらか一方の言語によって高めることができると示しています。



図：言語の表層面と深層面

Q. 母国語、日本語両方の言語で伸び悩んでいる生徒は各学年にどのぐらいいますか？

A. 各学年に必ずいます。母国語、日本語両方の言語で伸び悩んでいるところか、日本語がほぼゼロの状態で入学し、ひらがな・カタカナから教える生徒たちもいます。ただそれが良いか悪いかは一概に言えず、一つの言語がしっかりできている生徒はそこが強みになり、こちらが想像する以上に習得が速い場合があります。

**Q. 海外生活の中で日本語を維持、向上させるために
お薦めの方法はありますか？**

A. 一番大事なことは、日本を嫌いにならないことだと思います。例えばYouTube動画を見る、マンガを読んだり、映画を観たりするなど、好きなことを大事にしてください。自分では読みたくないけれど物語が好きなら、読み聞かせだけでも、本を耳で聴くだけでもいいので日本語に触れてください。そうすることで後から追いつくことができると思います。ただ日本語を学びたくないと思ってしまった場合、どんなアプローチをしても習得に時間がかかってしまうかもしれません。

海外での補習校生活は保護者にとって苦勞されたことと思います。毎回たくさんの宿題が出され、苦しく、大変ですよ。でも、それが出来なくても日本語を保持出来ないとは限りません。頑張っ取り組む生徒もいれば、そうでない生徒もいます。その場合は、とにかく「日本語を嫌いにならない」気持ちのベースを育ててください。そのベースがあれば日本に帰国しても最初は苦勞するかもしれませんが、その期間は短く抑えられるのではないかと思います。

Q. 外国籍の生徒たちが持つ、言語面での特有の悩みはどう指導していますか？

A. まず学園の入試では、日本語が喋れなくても生徒が話せる言語でどれだけの学力があるのかを試験します。入学後、国際学級では国語コースと日本語コースに分かれていて、帰国生と外国籍生とのアプローチの仕方は違う面もありますが、①言葉全体を支える ② Peer Learning ③自己肯定感の醸成という3つの要素は共通しています。そして、日本の大学を目指している生徒で、受験のシステムが分からない場合には、一緒に調べるところからサポートします。

06. 外国語保持クラスについて



Q. 生徒が培ってきた言語を保持するためにどのような取り組みをされていますか？

A. 英語に関しては、習熟度別に授業を行っています。

国際英語コース^{*5}は、欧米のカリキュラムをベースに、本校独自に組み上げた授業をネイティブの先生が担当し、Hクラス（Honours）とRクラス（Regular）に分かれて授業を受けます。一般クラスでも生徒の英語力に応じた習熟度クラスがあり、Aクラスでは、オールイングリッシュで行う授業も多く設けています。さらに外国語保持クラス（中国語、フランス語、ドイツ語、韓国語、スペイン語）では、希望者は週1回程度、放課後または選択授業時間内に受講することができます。部活などで放課後の授業を希望しない生徒もいますが、私たちの「全ての言葉を支える」、生徒の可能性を広げ、高めていくという理念から、その言語を持つ全ての方に受講を薦めています。

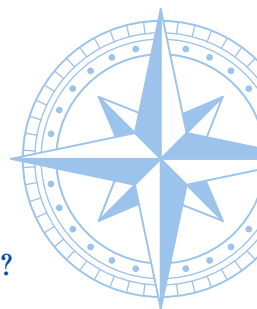
*5
国際英語コース
International English Course

英語圏からの帰国生や
国内・海外のインター
ナショナルスクールに
在籍していた生徒中心
のクラス

07. 進路や受験のサポートについて

Q. 大学受験や進路選択についての特別な指導やサポートはどのように行われていますか？

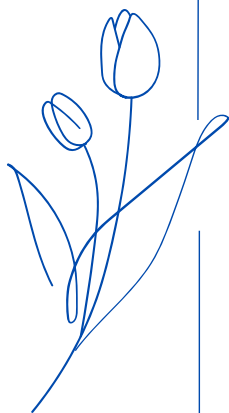
A. 勉強以外の経験として大切にしていることは、ロールモデルとなる人（同じような経験をした国際的バックグラウンドを持つ卒業生）との出会いを作ることです。国際キャリアガイダンスは年2回実施しています。春の高校生を主な対象にしたキャリアガイダンスでは、大学に通っている卒業生たちに受験について語ってもらい、秋に実施しているキャリアガイダンスでは社会人となっている卒業生たちに、現在どのような仕事で活躍しているかを語ってもらっています。これらのガイダンスは、生徒たちが進路選択に役立つ情報を得る機会となっています。



Q. 大学受験のサポートはどのように行われていますか？

A. 高校生とは個々に進路について話をする時間を設けています。そして、高校3年生に対しては志望理由書や出願方法、大学選びなど個々に応じて指導しています。進路指導は担任の先生を中心として行われます。ただし国際生ならではの進路や課題などがあるので、国際学級の教諭はあくまでも裏からのサポートというのを基本的なスタンスとして、常に相互に情報共有しながら生徒一人ひとりに合わせたサポート体制を整えています。

MEMO



☆Surveys☆

在校生＆保護者アンケート

実際に帰国した生徒たち保護者たちの
生の声を掲載します



What do you like about Keimei Gakuen?

啓明学園の気に入っているところ

注: (初)..初等、(中)..中学、(高)..高校

生徒編
Students



男女が自然に
接することができる環境
(高)

I like how in the
Kokusai classes teacher
put Furigana on the top
of the Kanji.
(高)

International students
can freely speak
English and receive
help with Japanese.
(中)

豊かな自然の中で
のびのびと学べる。
(中・高)

国際生が多く、居心地が良い
There is no racism in
this school.
(中・高)

The school celebrates the
international/cultural
background of student.
(初・中・高)

先生との距離が近く、相談しやすい
I like now most teachers were
able to understand my situation
and were able to help me.
(高)

帰国生でも学習しやすく、
日本語を学ぶサポートも
しっかりしている
(高)

保護者編
Parents
and Guardians

気軽に保護者同士が交流で
き、活動が強制でない親の会
があり助かっている
(中)

日本の教育環境に
ソフトランディングでき、
スムーズに馴染める
(初、中、高)

多様なバックグラウンドを持っ
た生徒がたくさんおり生徒同士
が個人を尊重してくれる
(中、高)

先生の理解と大きな見守りの中
で丁寧にご指導してもらえる
自己肯定感を育ててくれる
(高)

日本語や苦手科目のフォー
ーアップ、そして一人から
対応してくれる外国語保持
クラスがあり、
丁寧なご指導をしてくれる
(高)

International Office is
helpful to foreign parents.
(中)



英語授業の難易度を心配
していたが、レベル維持出来る
だけでなく、チャレンジ出来る
(高)

のびのびした校風で、変化の中
にいる生徒たちへの理解が深い
(中・高)

個性の違いを受け入れる
柔軟性をもっているところ
(中)

What problems have you faced at school?

学校で困ったこと 戸惑ったこと

生徒編
Students



国内生と日本語での
コミュニケーションに困った
(高)

広い校庭、自然が
いっぱい虫が多い環境に
戸惑った
(高)

制服を着なくてはなら
ないことに戸惑った
(中)

校内の掲示物が
日本語で読めなかった
(初)

海外との違いに様々な面で
直面する問題がある
(高)

教室の場所がわからず、
教科ごとの移動に困った
(中)

定期テストの勉強の
やり方に困った
(高)

先輩後輩の上下関係
に慣れること
(高)

which way should I go?

漢字が読めないので、
日本語の問題文の意味
がわからず困った
(高)

初等部から在籍する
生徒と仲良く出来るか
心配だった
(中)



保護者編
Parents
and Guardians

Our Japanese is limited
so we worry that may
not understand
everything.
(初・中・高)

カバン、靴やコートな
ど学用品に規定がある
(初)

学校との連絡に時間がかかる
ことがあり戸惑った
(初・中・高)

学校が土地勘のないと
ころだったので、慣れ
るのに苦労した
(初・中・高)

最寄駅から学校が遠い
(今はもう慣れた)
(高)

学校配布のプリントが日本語
なので子供が理解できず
親に渡さないまま期限が過ぎ
ることがある
(高)

国際クラスの授業を実際に
参観するまでは、未知の世界の
ことで少し不安でした
(高)

I'm not entirely
convinced that every
student is getting all
the help they need.
(初・中・高)

What did you consider when choosing a school for your child before returning to Japan?

帰国前のお子さまの学校選びでどんなことを考慮しましたか？

保護者編

Parents
and Guardians

受験に間に合う
帰国時期かどうか
(高)

友達とのコミュニケーション、友達関係。
(高)

日本の教育を受けるのが初めてのため
境遇を理解してくれる帰国生が
たくさんいる学校かどうか
(初、中)

何より優先したのは
「海外から来た変わった
子」を受け入れてくれる
学校かどうか
(中)



英語力の維持向上と日本語の
キャッチアップが同時に
できる学校かどうか
(中)

日本の授業について
いけるかどうか
(中)

転入・編入時期を柔軟に対応してくれる
学校かどうか
(初・中・高)

未学習領域や苦手科目
のフォローアップがあ
る学校かどうか
(高)

学校での生活習慣
に馴染めるのか
(初・中・高)

帰国生の大学進学
実績を見て
(高)

What I thought when I first returned to Japan. 帰国当初に思ったこと

断然TOPは「子どもの通学！」

- 通学に電車やバスを使うのが初めてで戸惑った
- 満員電車に乗ることが大変だった
- 駅員さんに聞いても日本語が分からないので、乗り換えに苦労した
- 人混みの中を歩くことが不安だった
- 自転車も歩道を走るの歩くのも難しく、すれ違う時どちら側へ避けるかも難しかった
- 車社会の現地生活から、慣れない公共交通機関を利用することが不安だった
- 歩道・自転車専用道・車道の区別がない道路の歩き方に慣れなかった
- 電車やバスの中で飲食をする、お化粧をする、床に座り込むなど日本独特の風潮に驚いた

車社会の現地生活から、バスや電車に乗ること、一人で歩くことに大きな不安を感じ、戸惑う帰国者の声は本当に多いのですが、一生懸命に説明してもリアルに理解されにくいのが現状です。これは親子で「習うより慣れる！」の心境で過ごしているうちに、時間が解決していきます。

日本の授業で戸惑ったこと

- 日本語で授業を受けること
- 授業での発言方法、スタイルの違い
- 言いたい事を日本語で十分に表現できないこと
- 跳び箱、縄跳び、マット運動、鉄棒、棒登り、水泳があること
- 音楽でピアノやリコーダー（縦笛）を吹くこと、クラスみんなが吹けること
- 教科によっては子どもが現地で勉強して来た内容と違うこと
- 日本独特の行事、運動会・体育祭
- 日本人のほとんどが、当たり前のように出来る不思議な体操「ラジオ体操」を知らないし、出来なかったこと
- 揃える文具がわからなかったこと

学校生活の中で文化の違いやギャップを感じたことは

- 算数の「A君とB君が・・・」という問題で、子どもの頭にはそれが人の名前だという発想が無く、アルファベットと漢字が一緒になった得たいの知れない言葉と捉えていたこと
- 「クラブに入る」という意味が分からなかったこと
- アメリカの中高におけるスポーツや音楽のクラブチームと、日本の部活は全く異なること
- 先輩後輩の上下関係や敬語の使い方に慣れておらず、文化の違いを感じた
- 初等部の制服が半ズボンだったこと
- 体育の授業で体操着に着替えること、お揃いの赤白帽子を被ること
- 初等部の児童が一輪車に乗っている姿

いずれにしても、子どもは親の考えている以上に学校や社会に適応しようと努力していますので、家庭ではしっかりと子どもの変化を見守り、励ましながら支えてあげることが一番大切のようです。

今だから思う入学・編入前に知っておきたかったこと

- 親が不安なことを相談できる場所、親同士の情報交換の場として、国際生保護者会（中1～高3合同）、グローバルネットの会があること
- 日本語が分からない、不得意だということは恥ずかしいことではない！と、子どもに言い聞かせておくこと
- 啓明学園の生徒・児童たちが、おかしな日本語を話す生徒や、いろいろな国の言葉を話す生徒がいることに慣れていること

帰国後「子どもは学校」「夫は会社」と、居場所が有って毎日を忙しく過ごすようになります。母親は以前とは違う文化・社会の変容に大きなギャップを感じ、周りに友人もいない見知らぬ場所で一人残されたような感覚になることがあります。グローバルネットの会では多くの方々が同様の経験を持っています。あなた1人ではありません、安心してください。心配に思うこと、不安に思ったことは気軽に先生やお友達に打ち明けて、一つずつ解決していけたら良いと思います。

☆Columns☆

～我が家と啓明学園～

帰国したご家庭の体験談を手記にいただきました



「日本語と日本の学習に重点を置きたい」

啓明学園 中2・2学期編入

息子が中学2年生の2学期から編入しました。アメリカで生まれた後3年間日本での生活を経て、3歳半からロンドン、マイアミ、ボストンに移り住み、11年間現地校生活を送りました。

私達が啓明学園を選んだ理由は主に3点あります。

- ①日本の学校や環境に適応するために作られた学校であること
- ②そのための日本語のサポートも手厚く個々の学習段階に応じてオーダーメイドのカリキュラムを作成してくれること
- ③4割が帰国生や国際生であること

多くの帰国子女向けの学校は、英語を伸ばすことに力を入れていますが、我が家は日本語や日本の学習に重点を置きたい気持ちがありました。しかしそのような学校を探すのは容易ではありませんでした。

コロナ禍を経た思春期の引越しで不安要素も色々ありましたが、編入4ヶ月を経て、英語で話せる友達も出来て、勉強も日本語のキャッチアップをしつつ本人のペースで頑張れる環境に母子共にとても助けられています。

「日本語の習熟度に合わせ寄り添ってくれる」

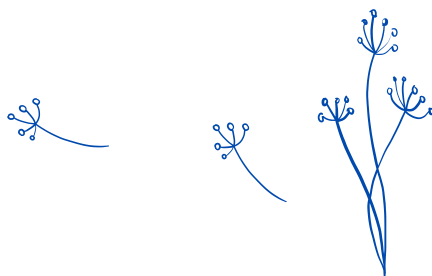
啓明学園 小5・1学期編入

息子は、生後7ヶ月からフィリピン、スリランカ、ドイツに滞在し約10年間で海外で過ごしました。学校はインターナショナルスクールに通っていました。

小学5年生の時に帰国し、日本での生活が初めてだった為、日本の教育にソフトランディング出来る学校を探しました。また、息子がドイツのように自然豊かな学校に行きたいという希望もありました。

その両方とも叶える事が出来るのが、啓明学園でした。5年生の1学期の途中から編入し1年半が経ちましたが、楽しく学校に通っています。日本語で分からない表現や言葉があってもみんなが優しく教えてくれるそうです。生徒が帰国生にとっても慣れていると感じました。

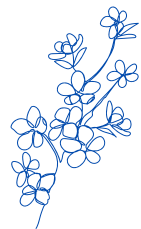
国際学級では、個々の日本語の習熟度に合わせ寄り添いながら指導してくださっています。そしてクラスに同じような環境の帰国生や外国籍の生徒もいるため、伸び伸びと過ごせる環境に大変満足しています。



「見守り続ける事の大切さ」

啓明学園 高1編入

小3からメキシコ、アメリカで過ごしGrade9を終え、日本に帰国しました。補習校に通っておらず最初は日本と海外の違いに驚き、戸惑う日々でした。親として一番心配だった事は学習面での日本語、国語でした。初めての国際保護者会で先生にご相談すると「15年の遅れがある。この遅れを2、3年で取り戻せると思いますか？もっと長い期間で見てください。」私は大学進学という事ばかりを気にしていたことに気づき、ハッとしました。ふと息子を見ると焦っているのは私だけでした。啓明で過ごす中で長い期間で見守る事、見守り続ける事の大切さを痛感しました。そんな啓明の雰囲気は友人と英語で自然と話せる環境、国際英語教育の素晴らしさ、ネイティブの先生との個人面談がある、メディアスタディーズでもネイティブの先生の指導を受ける事ができる、ネイティブの先生によるスペイン語授業も放課後受ける事ができる、こうだったらいいのと思う事もありますが良いところも沢山あります。今までの息子も今の息子も認めてくださる国際をはじめとする先生方！学習面だけでなく心も見て待ってくださるこの環境に息子がいる事ができた事に深く感謝しています。無事に行きたい大学を見つけ進学する事ができました。ありがとうございました。



「思い出す先生方や仲間の支え」

啓明学園 高1 入学

計7年間、2度の台湾生活で幼稚園小中学校に通いました。一時帰国の際に見学した啓明学園の国際学級の先生に「ドリルに気持ちが向かないなら、YouTubeでも漫画でも良いから日本語に触れていてね。日本語を嫌いにならないでね」とアドバイスをいただきました。

高1で啓明学園に入学し、国際学級で習っていない漢字を小学校まで遡って勉強し、日本が好きになれない気持ちも仲間と共有できました。啓明からのカンボジア・ワークキャンプ*に行った際、言語が通じない国で絵を描くことでコミュニケーションを取ることができ、そこからアートの道へ進むことを決めました。その決断も先生方は温かく応援して下さい、希望通りの美術大学に進学することができました。

大学4年生時に教育実習で啓明に戻りました。日本語に大きな遅れがあった私が日本語で授業することに、私以上に両親が驚き喜びました。文化の違い、言葉の奥にある意味がわからず戸惑っている国際生を見て、自分自身を思い出しました。そして様々なトラブルを解決すべく、国際学級の先生をはじめ、すべての先生方が相当なエネルギーを注いで対応をされていて、自分たちがこのように支えていただいていたとわかり、感謝が溢れました。

現在、大学院でアートプロジェクトについて学んでいます。啓明で温かく受け入れてもらった優しい時間を胸に学び続けていきます。

*カンボジア・ワークキャンプ

カンボジアワークキャンプとは啓明学園の海外体験学習の1つです。NPO法人アジアの子どもたちの就学を支援する会（ASAP）によって建てられた小中高の児童生徒と交流します。また、啓明学園の裁縫プロジェクトStitches for Richesに参加しているカンボジアのお母さんたちに出会い、学びを深めます。

「帰国生を温かく受け止めてくれる」

啓明学園 小4・2学期編入

現在高校1年生の娘が、編入したのは小学4年生の2学期でした。

当時はアメリカの僻地で日本語環境はもちろん現地の学校で学年唯一のアジア人、兄姉と話すのは英語だけという状況でした。上の子供たちの帰国生を受け入れる中・高校の選択肢と比べると小学校の数は本当に少なく、学校選びが悩ましいものでした。学校説明会で国際学級では丁寧に日本語指導してくださること、国際英語学級ではアメリカ・イギリスの学年同等の英語教育を受けられることが決め手になりました。

今懐かしく思い出されるのは、9月に編入してすぐに行った1泊の奥多摩宿泊体験学習です。奥多摩の多摩川の源流に「最初の一滴」を探しに行くというテーマでした。アメリカの学校では宿泊学習など経験したことがなく、新しい学校のみんなと一緒に仲良く行動ができるのか、馴染みのない野外学習、しかも野山を歩くことについて行けるのか、親としては様々な心配が頭をよぎり帰って来るまで落ち着かない2日間を過ごしました。けれども心配をよそにたくさんの「初めて」を経験して、少し遅くなった娘が戻ってきました。冷たい雨が降るなか、レインコートを着て山道を歩き、多摩川誕生の瞬間「最初の一滴」を見たときの感動は大きかったようです。バスから野生のサルを見たことも嬉しそうに話してくれました。口には出しませんでした。日本語で話を聞いたり、自ら話したりすることは、かなり苦労したと思います。しかしそんな娘を帰国生に慣れた先生方やクラスメイトが温かく受け止めてくださったから楽しい経験になったのだらうと思っています。

あれから6年間が過ぎ、高校1年生の今、国際学級を卒業し一般学級で全教科を学習できるようになりました。英語も保持するだけではなく、学校で実施している TOEFL テストのスコアをみても英語の言語力も伸び続けているようです。これは一重に啓明学園の持つ国際学級と国際英語学級のおかげであると感謝しております。国際英語では、シェイクスピアをはじめ多様な文学に触れ、娘はますます本好きになっています。8年半もの学生生活を送ることになる学園に、「二十歳の成人式」で帰るときにはどんな将来の夢を抱いて参加するのか今から楽しみにしています。



おわりに

啓明学園は、創立当時の理念に基づき帰国生や外国からの編入生たちを受け入れるために、とても良く配慮された学校です。国際学級のシステムやプログラムなども親切丁寧で、編入して不安を抱える子どもたちが、一日も早く日本に馴染み、安心して楽しい学校生活を送れるように様々な工夫や心配りで、生徒達に寄り添う形で受け入れて下さいます。帰国生を受け入れている学校はたくさんありますが、啓明学園のように長い歴史の中で培ってきたノウハウを持ち、帰国生・国内インター生・外国籍生の教育に力を入れている学校は無いでしょう。それでも、帰国編入された全ての方が満足する訳ではありません。学校はユートピアではないのです。日本の学校である以上、日本の教育システムを遵守しなければなりません。しかし、啓明学園は、その範囲の中で出来る限りの受け入れ態勢を構築して下さっています。この環境の良さをしっかり認識しながら、子ども達が伸びやかに成長し、広い世界に羽ばたいて行けるよう、学校と保護者とが協力し合い理解し合いながら暖かく見守っていくことが大切なのではないでしょうか。



グローバルネットの会 -Global Net-

場所/時間：管財棟 2F 第2会議室 10:30～12:00

活動日：毎月1回 木曜日 or 土曜日



企画・作成・発行：啓明学園親の会 グローバルネットの会

2008年 初版第1刷発行

2024年 増訂版第1刷発行

本サポートBookの一部または全部を許可なく引用、複製、複写、データファイル化することを禁じます。

*All or any part of this publication may not be reproduced without permission from the publisher.

連絡先：啓明学園 〒196-0002 東京都昭島市拝島町5-11-15

電話：042（541）1003(代)



